

農産物の新たな販路開拓として活用「ふるさと納税」

読者の皆様は「ふるさと納税」を利用されたことはありますか？CM等によく見るようになったのでご存じの方も多いのではないでしょうか。因みに筆者本人は一度も利用したことはないのだが親族が利用しており、その返礼品の御相伴を賜る形にて間接的に利用している形となっている。利用したことがない方の意見は「面倒くさそうだ」「どうせ裏があるんでしょ」「寄付する位なら私に寄付してよ」など、よく理解もせずスルーしてしまっている方も多いのではないでしょうか。

とある水稲や野菜を生産する複合経営型の農業生産法人に訪問した時の話だ。年末に近づき世話もなく梱包出荷作業をされていた。何の気なしに「お歳暮ギフトの産直でも始められたんですか？」と聞くと、「ああ、ふるさとだよふるさと」と教えて頂いた。「ふるさとってふるさと納税の事ですか？」と気聞き直したら、「そうそう。コロナで米が動かない中でホント助かるよ。手間はかかっけどね」と、忙しくもまんざらでもない顔をされていた。確かにコロナ禍で米は例年通り動いていかない状況ではあるが、この分野は選択してもらえさえすれば直接消費者にダイレクトに届く。ある意味、新たな産直販売方式であると感じた次第だ。そもそもふるさと納税の仕組みを良く理解していなかった筆者であったため、あまりご存じない読者の方にも簡単にご紹介したい。

総務省のHPにはふるさと納税の導入について以下のように書かれている。「地方で生まれ育ち都会に出てきた方には、誰でもふるさとへ恩返しをしたい思いはあるのではないのでしょうか。育ててくれた、支えてくれた、一人前にしてくれた、ふるさとへ。都会で暮らすようになり、仕事に就き、納税し始めると住んでいる自治体に納税することになります。税制を通じてふるさとへ貢献する仕組みができないか」このような思いから制度が導入されたとある。なんとも出身地愛を引き付けるようなくだりだ。一方、ふるさと納税の仕組みはこうだ。何も出身地を支援しなくとも良い。ここがくだりと異なるところで腹落ちしないのだが、ふるさと納税を納めたい自治体を指定する事が出来、且つ寄附という形で納税者は納めた場合、その御礼として納税者は納税先の団体より返礼品を受け取る事ができる。勿論、翌年度分の住民税も減額されるという仕組みとなっている（ただし、所得額に応じた限度額はある）。制度を巧みに利用した誠に狡猾な方法であり、国と自治体が裁判で争った結果、司法の判断は法的に違反に当たらないとして当時はこの制度の不備を印象付けた事は記憶にあるだろう。制度はCMの効果も手伝って、ふるさと納税の利用率は年々上昇している。ふるさと納税に関する現況調査結果（令和2年8月5日 自治税務局市町村税課）によれば令和元年度の実績は4,875.4億円、受入件数は2,333.6万件となっている。平成20年度は81.4億円、受入件数は5.4万件であったため、この12年で受入額は約60倍、件数で432倍の上昇幅になっている。また、住民税控除額は令和2年度で3,391億円、控除適用者数は406万人という。年収1,000万円以上の所得者は50%以上の方がふるさと納税を利用したことがあり、年収500万円未満の人は20%程度となっているようで「高額納税者の税金逃れの新たな手法か」と僻みがさく裂してしまうが、利用は増加しているようだ。一方、利用者の増加に伴いこの制度に乗っかって地元農産物を返礼品として活用している自治体も多い。この類のサイトを検索すれば地元特産物の果物や米等の農産品が多く、また贈答用で利用されるような高額な農産物が多いようだ。米は返礼品の中でも比較的選びやすい単価で設定されているようで選択されやすい人気のひとつとなっている。ふるさと納税の用途についても自治体で報告されており、税の使い道が分かりやすい制度だ。少し筆者目線が強い内容となっているがここはお許し頂くとし、農産物の新たな販路開拓の意味も含めてふるさと納税制度を活用するののひとつではないだろうか。

「北陸の米どころ富山県」のご紹介

北陸3県の一つである富山県についてご紹介致したい。第一次産業は、水稲栽培(水田率全国1位95.9%)が盛んであり、明治時代から続く砺波地区やその後に発展した入善地区においてチューリップの栽培が有名である。漁業に関しては、富山湾は「天然のいけす」と呼ばれるほど豊かな漁場で、漁業や魚介類を使う水産加工・食品産業(鱒寿司など)が発達している。他県に無い特色としては伝統的なブリ定置網漁、日本唯一の群泳海域を持つホタルイカ漁、保存技術の発達で可能になったシロエビ漁など。また、元々は捨てられていたゲンゲ(幻魚)は網に掛かったものが食用とされている。カニ籠漁は魚津が発祥である。第二次産業は、合金加工、工業機械、自動車部品、電気機器、電子部品等の製造業が発達している。「越中の薬売り」の伝統から医薬品の製造・販売が盛んである。製菓業は景気後退や高齢化の進行に強い。ジェネリックブームの恩恵もあり、近年安定して伸びているようだ。

最近、小矢部市にある道の駅「メルヘンおやべ」に立ち寄った。同道の駅には、人参・大根・葱・いも類・白菜等の野菜やお米、果物ではリンゴが並んでいた。高岡市の「万葉の里高岡」では農産物は殆どなく加工品を中心とした販売構成のようだ。富山の農産物と言えば間違いなく米であるが、早生品種：ハナエチゼン・ひとめぼれが親の「てんたかく」、中生品種：「コシヒカリ」、晩生品種：富山36号・と系1000が親の「てんこもり」に力を入れている。また、県が平成15年から高温でも高品質なお米となる遺伝子の検索・特定に着手し、平成24年～平成25年に特徴として①高温に強い②草丈が短い(倒伏に強い)③いもち病に強い遺伝子を持つ品種を選抜し「コシヒカリ」に交配試験をスタートさせた。平成26年～平成28年には育種した試験品約3,000個体から、3つの特性を持ち、且つ良食味を合わせ備えた最も優れた1系統を選抜し「富富富(ふふふ)」と命名、平成29年には県内23ヶ所で栽培実証を実施した。平成30年秋にデビューした「富富富」の命名の由来は、富山の水、富山の大地、富山の人が育てた富山づくしのお米であることを表しており、ごはんを食べた人に「ふふふ」と微笑んで、幸せな気持ちになってもらいたいという想いが込められているようだ。取引先の方にお伺いしたところ、農家が栽培するにあたり、県に登録が必要であり、肥料・農薬は指定の資材を使用する等の要件を満たす必要があり、普及はあまり進んでいないとの事。富富富の出荷は今年が3年目であり、市場にはまだまだ出回らないだけに一度食べてみたいと思わせるお米であると感じた。各県とも水稲の新品種に力を入れており、美味しいお米が誕生するのは嬉しい事だ。

最近、小矢部市にある道の駅「メルヘンおやべ」に立ち寄った。同道の駅には、人参・大根・葱・いも類・白菜等の野菜やお米、果物ではリンゴが並んでいた。高岡市の「万葉の里高岡」では農産物は殆どなく加工品を中心とした販売構成のようだ。富山の農産物と言えば間違いなく米であるが、早生品種：ハナエチゼン・ひとめぼれが親の「てんたかく」、中生品種：「コシヒカリ」、晩生品種：富山36号・と系1000が親の「てんこもり」に力を入れている。また、県が平成15年から高温でも高品質なお米となる遺伝子の検索・特定に着手し、平成24年～平成25年に特徴として①高温に強い②草丈が短い(倒伏に強い)③いもち病に強い遺伝子を持つ品種を選抜し「コシヒカリ」に交配試験をスタートさせた。平成26年～平成28年には育種した試験品約3,000個体から、3つの特性を持ち、且つ良食味を合わせ備えた最も優れた1系統を選抜し「富富富(ふふふ)」と命名、平成29年には県内23ヶ所で栽培実証を実施した。平成30年秋にデビューした「富富富」の命名の由来は、富山の水、富山の大地、富山の人が育てた富山づくしのお米であることを表しており、ごはんを食べた人に「ふふふ」と微笑んで、幸せな気持ちになってもらいたいという想いが込められているようだ。取引先の方にお伺いしたところ、農家が栽培するにあたり、県に登録が必要であり、肥料・農薬は指定の資材を使用する等の要件を満たす必要があり、普及はあまり進んでいないとの事。富富富の出荷は今年が3年目であり、市場にはまだまだ出回らないだけに一度食べてみたいと思わせるお米であると感じた。各県とも水稲の新品種に力を入れており、美味しいお米が誕生するのは嬉しい事だ。



コロナ禍が依然と続いているが、当支店がある大阪もGoToキャンペーンが始まり人出は春～夏に比べると若干多くなったようだ。ここに来てコロナ重症患者が増えており、独自に設けた「大阪モデル」で赤信号が点灯している。一日も早くコロナが終息し富山県を始め各地に気軽に出かけられる日々が来ることを切望せずにはいられない。(大阪支店)

今年の年末年始は帰省をするか迷っている方も多くいらっしゃると思います。私もコロナ禍が始まって以来、帰省するタイミングを逃してしまい、しばらく帰省が出来ておりません。第三波が落ち着いたら帰省しようと思いますが、早く終息して欲しいものですね。編集集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>